

夫・姑など家族との関係について

26.主婦という立場の苦痛

子どもが生まれたら子どもが第1、親は第2。
主婦であること、母親であることを忘れるなど言われた。
出張で家を任せてもいいやって思っても任せられない気がする。
夫が帰ってくるからこうしてこうしなくてはと追い詰められた。
家族に配慮しろと口に出して言われている訳ではないんですが。

27.夫とのすれちがい

夫と感情的にこじれたりしていて。
グループにいく私に、夫はどうしてそんなところに行くの？と。
ここのところ子どもを怒ってないということが夫にはわかってもらえない。
夫には、私が家族関係の構築とか難しいと感じていることがわかってもらえない。
わからないだろうという夫へのむなしさ。

28.夫の父親としての行動

夫が子どもの宿題を手伝ったり一生懸命やっている。
夫が子どものところへ行っただめて。
夫は子どもしか目がない。

29.夫の支えが必要

私が自分の問題に必死に取り組まねばならないことをわかっていて勤務をローテーションして。
夫が居るから抜け出せるのかなと思ったことがありました。
夫が帰ってくると緊張がほぐれる。
その気持ちを夫に話したらわかっているって言ってくれた。

30.子どもが夫を頼ること

子どもが夫に私が手をあげたことを言いつけていた。
父親が帰ることになると、子どもは愛情を求めて。
父子の世界へ嫉妬と孤独感を感じてチェックを入れたくなる。
やっぱり子どもは父親に来て欲しいんだなって。

31.夫との話し合いがしたい

夫が子どもと接する時間が少なくなったからじゃないかって言った。
夫がなんとなく口を聞いてきた。
夫と話し合う機会がある。

32.家事への無気力

気力がなくて悪いモードに嵌まっているな。
家に居るとずっと不安で苦しかった。
家のことに対する無力感がある。

33.夫に支配されている自分

この人とは安全な関係を築けないと思ってて。
夫が1歩先をいって夫の選択肢の中で私が選ぶ。
関係のパターンが決まっていて主張しきれず引きずられる。

夫自身の不安を私に肩代わりさせようとしている。

34.夫にふりまわされたくない自分

今はあなたはそういうことを思っているのねって思うことにしよう。

自分の大切なものは自分で守ろうって思った。

自分で引き受けてやっていくしかないと思っている。

私は夫に振り回されず自分の意見を言えた。

35.姑との関係

姑と接していると攻撃されている感じがするんです。

私が顔を見せないって言われてて。

姑との関係は生活が乱れない程度にかかわりたい。

母は不安をコミュニケーションの手段として使っている。

友人・社会における人間関係について

36.社会生活・近所付き合い

子どもと友達になることを敬遠されてうちには遊びに来てもらえない。

近所であのうちはどうかしてると思われている。

中・高校生の問題行動が母親の愛情不足で起こるといわれて。

子どもがいて地域の人とやる自信が出来た。

37.友人・他者の力を借りる

このつながりを広げて根付かせることをやろうよと言われて。

友達に電話して聞いてもらった。

今、付き合っている人たちを大切にしていこう、逃げ出さなくていいんだという思い。

38.学校・保育園に関すること

先生が子どもに「気にしないんでいいんだ」とお母さんのつきあい方を言ったそうで。

保育園の先生もがんばって治るものではない、様子を見ましようって言うから。

保育園の先生に迎えに行くとき子どもの悪いことを言われる。

39.対人面での過敏な自分

自分は人に怒られると全否定されている気がする。

私の中ではいつもここの関係が終わればこの人達とは終わり自分から切っている。

一緒に話してみたいと思っても空回りする。

私は、いいなと思っていた人の悪いところが見えると離れてしまう。

自分のやったことが他の人にどう影響するのかという怖さがいつもある。

40.仕事に関すること

仕事が好きだとかいいながら本当に好きなのかなと。

仕事の顔のほうが楽なんですよ。

いつかは働きたいと思ってたが。

具体的にあんな仕事しようかなとか思う。

自分の生育過程について

41. 自分の過去を整理したい

母方の生育暦を思うと自分では受け止めきれなくて。
自分の過去というのが大変だったとやっと思えるようになった。
自分の育った環境の人間関係は1人1人努力しても家に居場所がない気持ちで生きてきたから。
自分の育った家族のことはまだ言語化できない。感じないでいようとしている自分があるんだなって思った。
今は父に対する怒りのほうが多いが、でも死んでいるので。

42. 愛されなかった自分

私は親にかまってもらった実体験がないから。
洗濯機の横で怒られていたシーンしか思い浮かばない。
親も私のことが面倒臭かったのか愛された感覚がない。
母とよく似ている人とは重なって、やっぱり愛情が欲しいと。

43. 自分の親・きょうだいからの支配

子どものころ母親に怒られるのではといつもびくびくしていたことを思い出す。
自分の目から見た母は支配的だったと初めて思った。
母が怖い存在になっていた。
サイコドラマで母役の人に怒りを出そうと思ったのに思わず謝ってしまった。

44. ぎこちない子どもとの関係

どういう風に愛情を示せばよいか愛し方がわからなかった。
一方的に愛するのではいつ崩れるのかと緊張する。
親子関係の緊張感が自分の子育てに問題としてあるなど。
子どもと関係作っては積木崩しみたいに崩す。安定感が無いなど。
子どもが愛情を求めているのを見ると、彼を支配するのっではと怖い。

45. 自分の育った家族と現在の家族

私が過去の問題に直面してそこから回復するよりも、子どもの回復の方が早い。
自分の抑圧してきた傷にも繋がるんで。
サイコドラマで、本当は父に言いたいのが、子どもに攻撃しているのがわかる。
現実の親子との関係と、親との関係が2重の関係になって苦しむ私たち。

いま・ここのグループについて

46. いまのグループの心地よさ

何回か通い、皆に助けられて居心地が良くなって風を入れてもらった。
やっぱり同じ立場のグループはいい。
みんなの成長はすごいと。
サイコドラマは、考えていた以上の心の動きに驚いた。

47. グループでの緊張

初めは緊張があった。サイコドラマも初めは苦手だった。
グループでの話は、自分と比較したり、劣等感で辛くなることも。
最初はグループで本当の関係が治るのかしらって思って。
カウンセラーに、受け止められてもある種の反発を持ちながら考えていた。

(3) 課題意識の変容

次にメンバーの課題意識が、グループプロセスにおいてどのように変容するかについて検討する。各カテゴリが7回のバーバルセッションの各回において出現した数について多い順に並べて表1に示した。メンバー5人の誰もがその回にそのカテゴリが示す課題について発話した場合は数値が5で最大値であり、だれも発話しなかった場合の数値は0である。したがって数値は発話の量や頻度を示すものでない。

①まず、各回の数値の合計に着目すると、セッションの前半に比して後半にいくほど数値が低くなり、セッション当初のメンバーがあれもこれも話したいという状態から、発話内容の種類が絞られていく様相があらわれている。個人差もあるが回を重ねていくうちに少しずつ自己の課題意識が明確化していくということであろう。

②次に、各カテゴリにおける5回のセッション全体の数値についてみる。表1に示されているように、上位には、「自分なりのやり方でいい」「完璧でなくてもいい」「変わりたい自分」のようなこうありたい自分、このようにして保たれる自己肯定、自己受容の感覚などを示すカテゴリが並んでいる。そして「子どもへの接し方の難しさ」「子どもの成長への気付き」など子どもとの関係、さらに「夫とのすれちがい」など夫についてや「自分の過去を整理したい」など現在や過去の人間関係に関するカテゴリがまとまりをもちながら続いている。子どもとの関係を課題とする親たちのカウンセリングや支援が、とにかく子どもとの接し方のみに焦点が当たることが多いことに関して示唆が多い結果である。

③セッションが進むにしたがい、メンバーの課題意識がどのように変容していくかについて検討するために、メンバーの4人以上が発話したカテゴリ、つまり数値4以上に着目して、「全回に多い」カテゴリ、「前半多く、

後半少ない」カテゴリ、「前半少なく、後半多い」カテゴリを抽出してみた。表1に示されたように、比較的どの回にも多くのメンバーによって発話されるカテゴリは上位4つのである。次に前半多く後半少なくなるカテゴリは、「子どもへの拒否的な感情」「好きでない自分の性格」「イライラする感情」のように情緒や感情にかかわる発話である。トップに「いまのグループの心地よさ」があることと関連させて、セッションのはじめの段階では感情的な表現で語られていくさまざまな課題が、受容的、共感的状況におけるグループ体験によって焦点が明確になり変容していく過程がよくあらわれている。それと反対に、前半少なく後半多くなっていくカテゴリとして「自分の過去を整理したい」「自分の親・兄弟からの支配」と「友人・他者の力を借りる」である。ここにあらわれてくるのは、メンバーが世代間連鎖における課題を次第に意識し、そこからの回復を志向していくためには、友人やこのグループのような社会資源の活用が必要であると強く自覚していく過程であろう。このことは、本プログラムに明瞭に現れている親支援の有効な側面であると考えられる。また、本プログラムの主旨について前項では「自己の育ちを実現する援助活動」という表現がなされているが、その意味では本研究においてその有効性が実証されたと考える。

(4) 課題意識の構造 I

作成したカテゴリ間の関係を見るために、47(カテゴリ)×5(メンバー)の発話回数を双対尺度法により整理した。対象となった6名のうち1名は途中参加だったため、双対尺度法の分析の対象からは除外した。残りの5名のうち、欠席が1回あったものが1名いたが、全発話回数は他のメンバーと変わらないと判断しそのまま分析を行った。この際、メンバーによっては同じカテゴリに属する

発話を何度も繰り返すことも多かったため、対象者ごとに同一セッションにおける同一カテゴリの発話は何回あっても1と数えることとした。結果を図1に示す。第Ⅱ軸までの寄与率は、65.3%であった。

①第Ⅰ軸(X軸)は、負方向には、「子どもとの適度な距離をとる」「子どものありのままの受容」「子どもの困った行動」「きょうだい間のもめごと」といった子どもに関するカテゴリが布置し、原点付近に、「自分の不適切な養育」「変わりたい自分」「自分なりのやり方でいい」「自分を大切にすること」といった自分に関するカテゴリが布置している。さらにその右側には、「友人・他者の力を借りる」といった友人や社会に関するカテゴリが布置している。またⅠ軸の正方向には、「夫との話し合いがしたい」「夫にふりまわされたくない自分」といった夫に関するカテゴリが布置している。したがってこの軸は、<人間関係の担い手>について示していると考えられる。

②第Ⅱ軸(Y軸)については、正方向に「子どもが夫を頼ること」「体調をやってしまう」「子どもへの拒否的な感情」「ぎこちない子どもとの関係」といった他者との密着した関係に関するカテゴリが多く布置している。負方向には、「子どもとの適度な距離をとる」「自分を大切にすること」「夫にふりまわされたくない」といった他者との適度な距離のある関係に関する内容が多く布置している。この軸は、自分をとりまく他者との関係における<関係の境界領域>の構造を示した軸であると考えられる。

③この結果から、グループカウンセリングのプロセスにおける虐待に悩む保護者の課題意識の構造について考察すると、図の上半分からは、「子どもからの甘えの要求」に困惑し、「子どもが夫を頼ること」にいらだち、「体調をやってしまう」や「子どもへの拒否的な感情」のとりこになる項目が狭い範囲に布置し、自分と子ども、夫の関係における「感情」と「行為」が絡み合っ、自分をとりまく密着した諸関

係が整理されていない様相が読み取れる。一方、図の下半分は、子ども、自分、夫のカテゴリが距離をもって布置され、それぞれが独自に適度な距離を保ちながらかかわっている様相が読み取れる。

注目すべき点について、中間部の左側(第Ⅰ軸の負方向)には、「愛されなかった自分」、「自分の過去の整理がしたい」といった過去から現在につながる生育過程における個人的な課題に関するカテゴリが布置し、右側(第Ⅰ軸の正方向)には「いまのグループの心地よさ」といった現在から未来につながるグループカウンセリングに参加していることに関するカテゴリが布置していることである。つまり、自分自身や子ども、夫などとの関係に分ちがたく固着している問題を見つめ、それらの関係を整理して未来に向けて生きていくためには、個人的な体験である過去相がグループ体験という現在相において受容されていく時空間の交差領域が重要な意味を持つのではないかということが示唆されている。中央部には、「変わりたい自分」「自分の不適切な養育」「自分の過去を整理したい」「好きでない自分の性格」といった自己に関する内容が多く布置されていて、こうした自己-他者関係の境界領域への洞察が契機となって、「自分なりのやり方でいい」へつながり、密着した関係から適度な距離のある関係へと向かうものとも読みとれる。最下部に位置している「子どもとのやりとり」は、それぞれが独立した人格として交流できる親子関係のあり方を示しているように思われる。

④グループに関する内容については、上から「グループでの緊張」「いまのグループの心地よさ」が並んでいる。自己に関する内容に近接して「いまのグループの心地よさ」が布置しており、自己の洞察にグループにおける活動が役立っていることをうかがわせる。また、「グループの心地よさ」は、<人間関係の担い手>を示していると思われるⅠ軸上では、友人、他

者の領域に位置していることから、グループの活動が新しく活用しうる資源のように位置づけられていて、その意義を考察する上で興味深い。

(5) 課題意識の分類

次に作成したカテゴリの類型化を行うために、双対尺度法で得られた全スコアを元に、ウォード法によるクラスター分析を行った。図2はそのデンドログラムである。距離20でクラスターに分割した結果、47カテゴリは6つのグループに分類された。

6グループは、それぞれに属するカテゴリの内容から次のように命名した。

第1グループ <いまの自分の受容>

第2グループ <人間関係における居心地の悪さ>

第3グループ <子どもについての気がかり>

第4グループ <子どもとの交流>

第5グループ <子育ての疎外感>

第6グループ <家族の中の支配>

上記6つのグループは、虐待に悩む保護者の課題意識についての類型化とその相互関連性が構造的に示されていると考えることができよう。大まかな解釈を行うと、第1グループの<いまの自分の受容>の課題意識が、第2グループ<人間関係における居心地の悪さ>というさまざまな生活経験においても感情と比較的低い段階で結びつきその関連性を示し、それが第3グループの<子どもについての気がかり>と結合する。その上には、第4グループの<子どもとの交流>と第5グループ<子育ての疎外感>の2グループが結合したいわば子育てにおける体験との関連性を示している。第6グループ<家族の中の支配>は最終的な段階で結びつき、独自の性質をもって影響を与えているものと考えられる。

4. 今後の課題

実践・事例研究を深めながら、本プログラムの実証性を積み重ねていくことが今後の課題である。

研究協力者：瑞穂 優（茅ヶ崎リハビリテーション専門学校）

引用・参考文献：

井上裕光 「集計データの記述 (1) データ記述法としての相対尺度法」 東京都立大学心理学研究 Vol.3 1993

平成13年度厚生労働科学研究報告書－被虐待児童の保護者への指導法の開発に関する研究、2002
瑞穂優 武藤安子 春原由紀 土屋明美 「親支援とグループアプローチ－グループ体験における意識の構造」2003年度日本保育学会論文集、2003
武藤安子 信田さよ子 春原由紀 土屋明美

「虐待に悩む親との臨床的アプローチによる支援プログラムに関する研究」平成14年度厚生労働科学研究報告書、2003

菅野幸恵「母親が子どもをイヤになること：育児における不快感情とそれに対する説明づけ」

発達心理学研究 Vol.12 No.1、2001

土屋明美 関係状況療法の理論 関係状況療法関係学研究所、2001

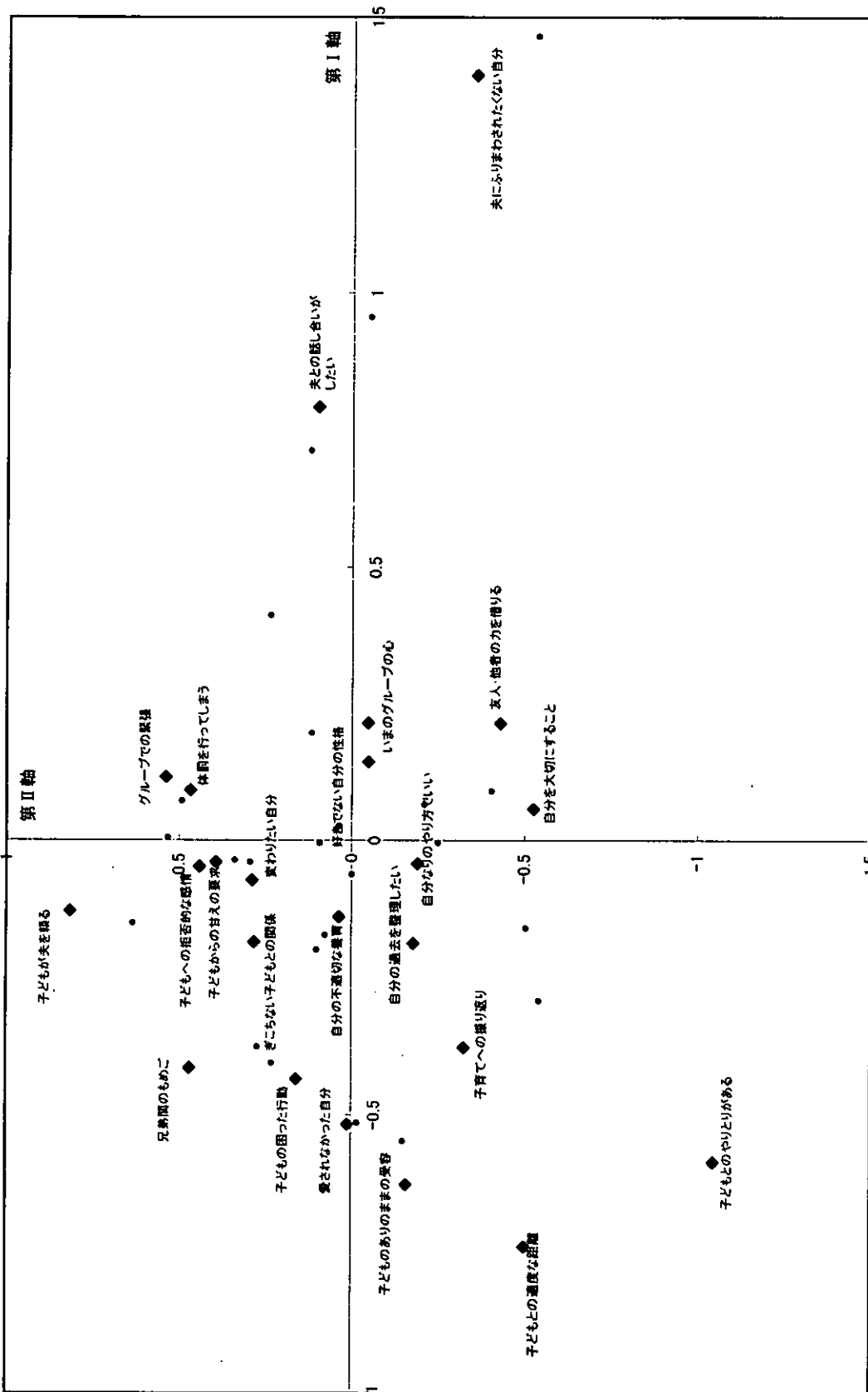


図1 双対尺度法による分析結果

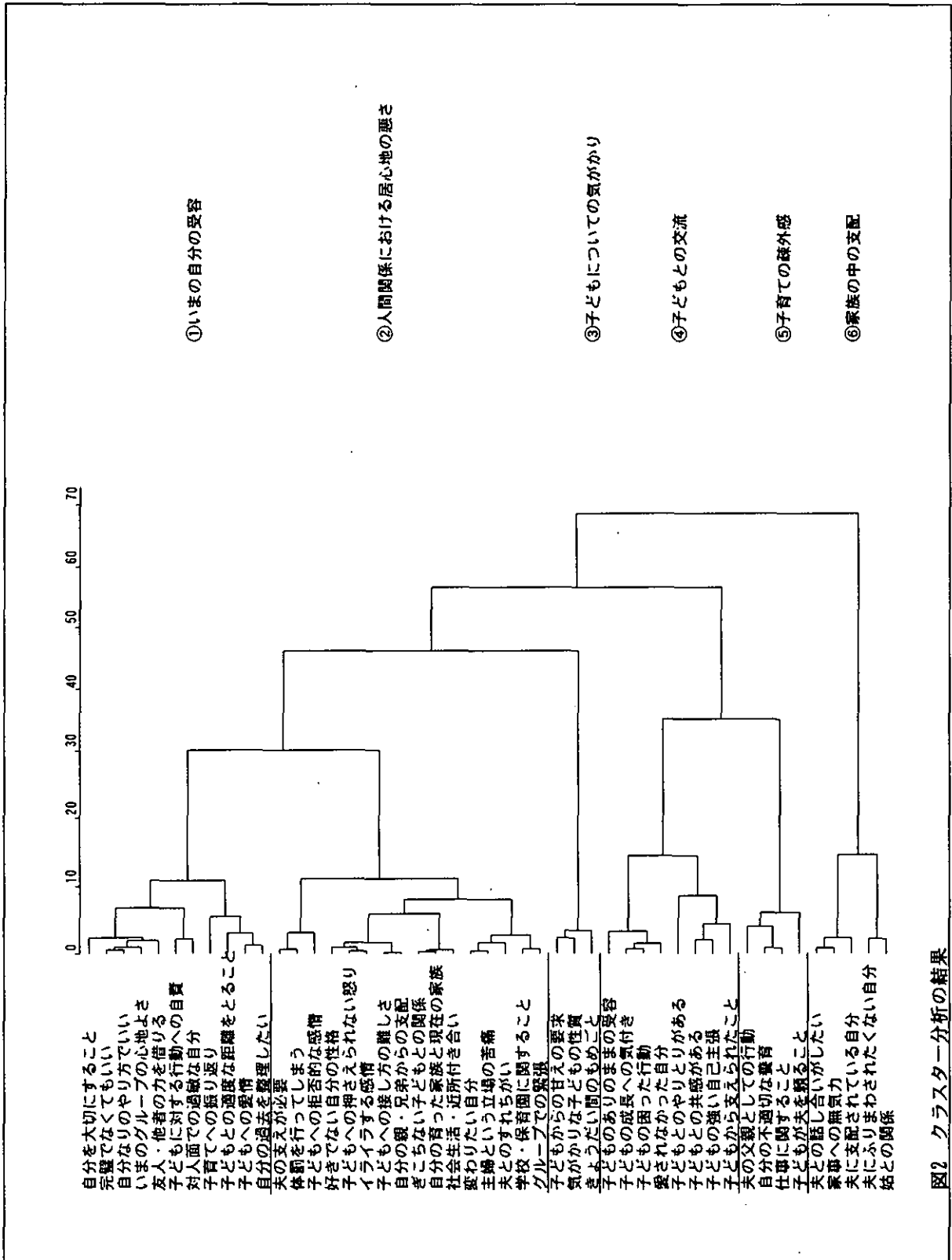


図2 クラスタ分析の結果

Ⅳ 虐待に悩む親とのアクション・メソッド；サイコドラマの展開

土屋 明美 春原 由紀 武藤 安子 信田さよ子

(相州病院・日本心理劇協会) (武蔵野大学) (横浜国立大学) (原宿カウンセリングセンター)

1. はじめに

本項では、V・Aクロスプログラムのうち、アクション・メソッド—行為法としてのサイコドラマの実際について論述する。

モレノ(Moreno,J,L.)によって創始され、現在では広範に活用されているサイコドラマ自体の詳細については省略するが、本項は、サイコドラマを日本に導入し、それを「心理劇」と訳した松村康平の理論的基盤と独自に開発した技法に基づいて展開した実践研究であることを記しておく。

2. サイコドラマによる課題へのアプローチ

サイコドラマでは、参加者から提出された課題を中心としてのグループによる演習形式、或いは個人に成立している関係世界や人間関係を探求するなどの方法が必要に応じて使われる。参加者は「子育てに悩む母親」という共通性をもちながらも、それぞれの抱えている課題は、子どもとの日常的かかわりの困難さ、人間関係の不自由さなどにとどまらず、自分自身の生き方についての問題や、生育環境から生起する問題、など多岐にわたる。参加者は「考えていた以上の心の動きに驚き」「だめな母親でだめな人間だと思っていた昔の私とは少なくとも違うやり方をしていた。母親も学習なんだ」と思い、「長い間自分を罰してきたあの場面をやってよかった」「わたしはここにいていいんだ」と今ここで、新しく生きている自分を見出している。

参加者から提示される課題は、大別すると次の7つに整理することができ、それぞれに有効な心理劇技法が適用可能である。

(1) 「現在の私」に関すること。

現在の私と出会うことは、グループに参加して、自分の考えていることをまとめて話したり、ふるまったりすることを要求される中で自然と促されることから生じる課題ともいえる。日常生活では流されがちな「自分である感じ」や「自分らしさ」を創りだすことが促される。バーバルセッションでは「私がカウンセラーに話す」構造が設定されており、サイコドラマにおいては「私にとって意味あること、私だけが知っていること」をドラマ的方法で共有する構造が設定される。

展開例；「自分の大切にしている物」技法。

自分の大切なものを一つあげて、その「物から自分をみる」試みがなされる。

(例：自分の大切なカップ。「今は子どもが小さくて危ないので棚にしまわれているけれど、もう少し子どもが大きくなれば一緒にこのカップでお茶を飲めるね。それまで待っているから、大切にしておいて」とカップが自分に語りかけてくれる。今は大変だけれど、先では楽しい時間が待っているという楽しみを語りかけている。これは、物から現在の私へのメッセージであり、物を通しての自分へのメッセージということができる。)

(2) 「親役割」を担うことについて。

「母親は・・・しなければいけない」とか「母親は・・・をすべき」という社会的・心理的束縛から子育ての悩みが拡大生産されている。母親にとっての、これらの束縛は、子どもの束縛へも連なるものであり、「子どもは親の思い通りになるもの」「子どもは・・・であるべき」という支配関係形成へとその矛先が子どもへと向かう。これら「母

親」役割を担うことにより生じる悩みは、役割の意味の違いから次の3層にわけて捉えることができる。社会一般から期待されているとみなされる役割像と実際とのずれから生じる場合（社会地位的役割としての親役割）と、子どもとうまく関わるができないと思うような、役割形成のあり方から生じる場合（対人関係的役割としての親役割）、また、自分への役割期待と実際のかかわりのずれから生じる葛藤的な問題意識（心理行為的役割としての親役割）、である。

展開例；「悪い母親役割をとる」技法。

「悪い親」を回避し、あってはならないものとして自分から排除するのではなく、「悪い母親」を意識して演じることにより、自分の持っている母親像や子どもへの期待に気づきやすくなる。自分が「悪い」と感じていることは、他の人にとってはなんでもないこともある、ということへの気づきが成立している。（後述の実際例参照）

(3) 家族と私の関係について。

三世代同居家族は少ないとはいえ、祖父母の存在は家族形成に多様な影響を及ぼしている。子どもの育て方をめぐっての嫁と姑の争いは、それが間接的であるがゆえに、さらに根の深い葛藤関係が生じやすいし、それに付随して夫婦関係についての問題が浮上する。また、子育てに父親の参加をと声だかにうたわれてはいるものの、帰宅の遅い父親には期待できないというのも現状であろう。また、自分と原家族との関係を担いながらの子育ては、自分の子ども時代を追体験することにも重なることであり、娘としての自分と母、娘としての自分と父との関係にも目がむく事態も生じる。

展開例；「家族関係のアクション・ソシオメトリー」技法。

自分を取り巻く家族関係を具体的に表す試みで家族関係の地図とも言える。自分を中

心として家族成員を空間に位置付けていく方法。その際に、自分とその人との心理的距離を位置関係で表し、その人から自分への特徴的な感情をアクションで表す。

（例：先ず、自分が真ん中に立つ。次に、自分の周りの人、動物なども含めて家族としてどのような人がいるかを考える。グループの人に、その人たちになって立ってもらい特徴的なポーズを自分が演じて同じようにポーズしてもらう。真ん中に立って自分から周りの人たちを見回し、次には自分がそれぞれの人の位置から自分を見る。他の家族から自分はどのように観られているのだろうか？以上が基本的な進め方で、1年後の関係を表すなど様々に応用可能である。）

(4) 私と子どもの関係について。

家族関係の中でも、特に自分と気になる子どもとの関係について考える。日常生活のなかで困ったことが生じると、自分の言い方が悪かったから、とか、子どもが悪いというように、どちらかが悪いという悪者探し、或いは自己否定することで問題を解消したように流してしまいがちである。子育ての悩みについては、すべてを自分にもどして解決するのではなく、その状況でどういうことがおきていたのかを距離をおいて見ることができることが大切である。子どもと距離をおいて関わるとは、自分が今・何をしているかが良く見えることであり、その場の「関係状況」が見えることである。サイコドラマではなにが起きているのかを、その時にどういうことを考えながらいるかをできるだけ具体的に再現して考えることをする。

展開例；「いろいろあっても構わない自分-3つの私に意識分化する」技法。

子どもとかかわることについて迷う自分に命名して、それぞれの自分を体験する技法。（例：だらしのない子どもにどうかかわるかということでもいつも迷う母親と。私としては；

ほっとけと思う私、何とかしようと思う私、コントロールしようとする私がいる。そこで、椅子を3つ用意して、3人の私がそれぞれ腰掛ける。「3人は、一人のAさんです。こどもにそれぞれの役割から関わってみましょう」)

(5) 私と子どもだった私について。

このグループでは、母親役割のレパトリーを広げ、母親役割の見方を広げることに主なねらいを成立させてドラマが展開するところに特徴がある。しかし、母子のやり取りなどを進める経過においては、役割を通して自分の原家族との関係が意識されるような状況も生じる。子ども役割をとって、「自分は子どもの頃このようには言えなかった」、とか「本当は、お母さんにこういうことをしてほしかった」などが湧きあがってくる。その様な場合には、クライアントの意向を確認して、その範囲内で場面設定を進め、感情的な整理を進める。

展開例：再現法—過去場面の再現により「今できている自分」をみつける技法。

(例：過去のことをやり直したい。「小学生の時に、正座させられてお父さんから弟と遊ばなかったことを叱られた。言い返せなかった。だって・・・と事情を説明したい。」)

(6) 様々な人間関係について。

家族をめぐる人間関係の問題状況は、問題が生じると長く家族に影響を及ぼすような場合から、その場限りとなることまで幅広くある。苦手な人との付き合い、学校での母親同士の関係や、近隣との付き合い、子どもの担任との付き合いなどから、電車の中での見知らぬ人とのちょっとした諍い、公園で子どもを泣かしてしまって虐待していると通報されるのではないかと世間の目が心配になる、など枚挙に暇がない。サイコドラマでは自分と人との関係が苦にならないような生

き方を模索する。例えば、苦手と思う人と出会ったときにその人と無理をして付き合うのではなく、付き合わなくて済むのなら付き合わないことも選択肢としてあること、もし、付き合うとしても人に合わせるのではなく、自分の考えを成立させて程よく関わることについてのリハーサルを行うこともする。子どもとの関係を考えることは、母親自身がより自分らしく生きることを考えるひとつのきっかけともなることである。

展開例；「偶然の出会い」技法。

自分の苦手な人と偶然出会うという設定のなかで、関係的に変化してふるまうことのできる自分を見出す。

(例：「私の苦手な人は、いろいろなことを根掘り葉掘りきいてくる」。参加している他のメンバー、或いは補助自我にその様な役割をとってもらい、偶然に町でその人と出会うという設定をする。いつもはしないようなかわり方も試みる。いつもであったら、1回のやり取りでひいてしまっていることであっても、サイコドラマでは何回でも関わる事ができる。自分に無理のないような対応のし方を体験しながら見つける。他の人が根掘り葉掘りきく人に関わる場面を観客で見ている、自分の参考にすることもできる。)

(7) これからの私。

子どもや家族との関係を考える時に、母親自身が元気であること、自分のしていることを肯定的に感じられることは関係を変化させる大きな原動力となる。また、現在の状態はずっと続くわけではなく、グループで考えていればいつかは変わっていくという将来への、楽観的考え方を成立させることができると、現在の状況に過度に集中して緊張することも軽減するであろう。「現在」という時間軸を中心にして、「これからの私」を描くことのできる事が期待される。

展開例：「魔法の店」技法。

お金は通用しないけれど、自分の何かと物々交換できる魔法の店。

(例：応用例「店主：この店は、あなたを元気にするいろいろなエネルギーを売っている店です。あなたの持っている何かと交換できます。必要ないもので売ってもいいものでもなんでも構いません。客：私はわがままになれるエネルギーをほしいんです。そしたらとても気分が良くなると思うんです。店主：その代わりに何をくださいますか？客：私は有り余るほど、自分はだめだとか、マイナスの考えを持っているので、それを置いていきます。店屋：急に全部置いていったら困ることはありませんか？客：そうですね、すごくたくさんあるので・・・大丈夫と思います。」)

3. サイコドラマの実際

ここでは、1クール10回のグループ・セッションのうち、3回目・6回目に行われたサイコドラマセッションの実際を、経過に沿って描述する。

第1部では、第3回目のセッションで、ウォーミング・アップから始まり、テーマが模索され、焦点化されて、次に場面化される経過を細述する。

第2部では、第6回目のセッションの場面化の段階で、3回目に残されたテーマの展開部分を描述する。

サイコドラマの進め方の特色としては、次の3点を挙げることができる。

- (1) 参加者全員が何らかの役割をとって参加する。
- (2) グループの展開過程で生じるテーマを中心に進める。

(監督は事前にテーマを用意しない。)

- (3) かかわり方の可能性の探求と、今・ここで・新しくふるまうことへの支援をする。

(親子のかかわり方について教育・指示的に進めるのではなく、いま・できている、好

ましいかかわり方について支持・肯定的に関わる。)

【第1部】

(1) グループの構成

担当者：監督、補助自我、記録者が各1人。

参加者：クライアント7名。

所要時間：1時間40分

(2) セッションの流れ

自己紹介で名前を言う→ローリング(2回；2回目は速く)→季節で思いつく言葉→食べたい食べ物→着たい洋服→絵本を作る→感想→立体的な物語作り(2人組で子どもとお母さん、話を続けていく。全組まわったら役割交換をして一周する。→感想→悪いお母さんを演じる(母、子)、感想→観客でいた3人には、どんなお母さんをやるつもりだったかを言ってもらう→関係発展評価法シートの記入*1

(3) セッションの実際

1. 心理劇の始まり

監督：名前の紹介をしましょう。(自己紹介として、名前だけを言って1回りする。)

サイコドラマでは、役割をとって動きながら感じることを中心として、お互いがかかわりながら気づいたことを共有しながら、進めていきます。今回を含めてこれから3回ありますので、今日は、サイコドラマへのウォームアップになるでしょう。

2. 演習—物媒介ローリング技法によるイメージ・アップ

監督：ローリングしましょうか。

- ①1回、このペンを右隣の方に渡しましょう。(ペンをまわす。)

- ②では、次には、早めに回しましょう。(早めにペンを回す。)

- ③今の季節は何でしょうね。(メンバーが、口々に)初夏、晩春・・・

今の季節で、思いつく言葉は何でしょう。

(嵐、五月、エープリルフール、GW、湖・・・)

④食べ物では、何を思いつきますか。

(かつお、小玉スイカ、びわ、オレンジ、食べ放題、・・・)

⑤着たい洋服は、どうでしょうか。

(短めのジャケット、ボディコンの服、7分のパンツ、着れるものなら何でも・・・)

<次ぎに予定されている物語づくりへのウォーミング・アップとなるように、想像を広げるような働きかけをしている。>

3. 絵本を創る。

監督：絵本の物語を作りましょう。一人がページの絵本を創り、次の方にバトンタッチをしていきます。ページをめくると季節が変わったり、話が飛躍したりもする絵本です。私からはじめますので、次の方は次のページを創ってください。4人で話は一区切りにしましょう。

<物語 1>

・フリフリの洋服の女の子が窓から外をみると、雨がしとしと降ってきました。

・新しい傘が使えると喜びました。

・外へ出ました。大きな水溜りがあって、転んでしまいました。

・どうしようかと思っていたら、日が出てきました。お母さんと一緒に洗濯をしました。

監督：登場人物は大きくなったり、場所も自由自在です。

<物語 2>

・あるところに、4人のクマの家族が居ました。お母さんと、お父さんと、お姉さんと、弟が居ました。春なので、外に出かけることにしました。

・みんなで歩いていると小川があった。天気が良くていい気持ちです。そこで、のんびりしようと思いました。

・ところが、川に下の子が流されて、助けると言っていますが、おぼれそうです。どうにもなりません。

・お父さんもお母さんもお姉さんもみんな泳

げません。どうしたらいいんだろう。と思ったそのとき、狩人のおじさんが通りかかりました。熊狩りに来たところでした。一生懸命に助けようとしている3匹の熊を見て助けなくちゃと思って助けました。クマのお父さんとお母さんは、狩人にお礼をしたくて、秘密にしてあった蜂蜜の巣に招待しました。狩人はクマは取れなかったけど、たくさんの蜂蜜を持って帰りました。

監督：次は、少し長い物語を創りましょう。<長い物語 3> 省略。

4. 感想

監督：物語を創ってみてどんな感じがしましたか、一言ずつお願いします。

○「ところが」とか、展開がおもしろい。

○緊張していました。

○人の話を聞いているときはすぐに話ができてそうなのに、いざとなると出てこない。絵本って、説教くさくなるといやだなと思って、最後は歴史小説みたいになってすごいな。

○お話をやってみると、ところが～だとか、違うのが登場して、困ったりすると、生き生きする。つぎどうなるのだろう。話ってメリハリが必要。あの時、なんであんなこといったのかな。自分に結び付けて絵本が小説になって、物語の可能性、すごいものがあるんじゃないか。みんなで作るのがおもしろい。

○いつも問題提起だったな。最後にはまとまりがある。いいお話になっているのは良かった。

○物語、シーンがカラフルに見える感じがして、赤い傘だったり、見えるのがおもしろい。見えている感じが変わってくる。Xさんのとなりで、見えてる世界がパッと変わる。変化を作る隣に居たので物語を新しく書き換えることができた。

○3つつくりましたが、知らないうちにするする出てきて考えないで言っていた。思いがけない展開をYさんがしてくれて、ああ良かった、想像してないことを。

○ダイナミックな展開になったときに、夢にしようと思った。途中、自分のイメージと最後まで実行するぞ。強引だなと確信しました。厭がおうでも引っ張る。強いと思った。

5. 演習— ロール・プレイングへ。立体的な物語を即興で作る

監督：今度は、絵本を2人で創りましょう。役割を取り、即興でやりとりをして絵本1ページをつくりまします。ペアで演じて、その役割を次のペアに渡して自由に即興でストーリーをつくりましましょう。立体的な物語と考えて進めるとしやすいでしょう。

役はどうしましょうか？今日は、2人組で、子どもとお母さんをやりましようかね。どちらがお母さんで子どもになるか決めてください。〈各ペアは、子どもとお母さん役を決める。〉

次のペアは、最後の言葉を重ねながらも、この場で新しく、親子のやり取りを進めるようにします。

ペア1 (子ども；A お母さん；B)

子：お母さん、公園で拾ったの。お金がいっぱい入ってるの。

母：警察に届けよ。

子：どうして。欲しいんだもん。いっぱい買えるよ。

母：うちのじゃないからだめ。人のお金だから。

監督：はい。(次のペアへ交代の合図)

ペア2 (子ども；C お母さん；D)

母：うちのお金じゃないからお金じゃないの。

子：じゃ何、これ？

母：落とし物。拾い物だよ。返してあげなきゃ。

子：返すの？

母：花ちゃんがね、大事にしていたビーズのネックレス、なくしちゃったままでいい？

子：いや。

母：じゃあ、返してあげよう。

子：あったところにおいてきたらいいかね。

母：どこだったかな。(監督が椅子を持ってきて、場面を明確にする。)

母：ラッキーと思ったのに。本当は欲しいよ。

子：お母さん、落とし物。

母：悪いよね。

ペア3 (子ども；E 母；F)

母：どのくらいあるか見てみよう。

子：すごい束だね。

母：お母さんも見たことない。

子：花ちゃん、数えらんない。アイス買っちゃおう。

母：もっと大きいもの買わなきゃ。

子：じゃあ、おうち。

母：まあ、足しにはなるわね。お父さんに相談しようか。

子：返せって言うかもよ。

母：どうしようか。うちかえって考えよう。

母役のFさん：悪い道を歩いた気がする。

ペア4 (子ども；G お母さん；H)

母：絶対だめ。警察に行こう。

子：いってみる？

監督：警邏中でお巡りさんは居ません。

母：絶対もらったらだめ。泥棒になっている。

子：困ったね。

監督：次は、子どもとお母さんの役割を交換して、話の続きを創りましよう。

6. 役割交換

ペア5 (子ども；B お母さん；A)

子：110番しようよ。

母：(電話をかける。補助自我が警官役で電話を受ける。) 交番へ行ったんですけど、誰も居なかったの、スーパーの前の・・・。

警察：200メートル北にある〇〇警察署まで持ってきていただければ。どのくらいですか。

母：チラッと覗いただけですけど。

警察：じゃあ、持ってきてください。

母：もうちょっと行ったところに、交番があるから行こう。

(母と子が警察へ行く。)

警察：落とし物の手続きをしてもらいましょう。100万の束ですね。いくつありますか。1,2,3、・・・13ありますね。どこで拾いましたか。

母：(子に相槌を送りながら、)公園よね。

警察：何時ごろ。

母：3時30分ごろ。

警察：今、5時30分ですけど。どうしてたんですか。

母：近くの交番へ行ったり、子どもが家に持って帰ったりしてたんで。

警察：半年たって、誰も取りに来なかったらそちらのものになりますんで。

母：(うれしそうに微笑む。)

監督：半年たちました。落とし主はいませんでした。

ペア6 (子ども；D 母；C)

警察：お宅には福の神がきたようですね。

子：花ちゃんが拾ったの。

母：じゃあ、お母さんが代わりに書いとくね。

子：もらえるの？

母：大きいお金なんで、家か車を買おうか。

子：おもちゃ欲しい。花ちゃんのものないんだよ。

母：ちょっとだけ買ってあげる。

子：花ちゃんのだから、お母さんが聞くんだよ。お菓子と、お洋服が欲しいからそれを買って、残ったのあげるやっばり、大きくなるまで貯金したい。

ペア7 (子ども；F 母；E)

子：大きくなってから使いたい。

母：いろいろ考えてるんだね。お金使うの大変だよ。欲しいものが決まるまで貯金しようか。

子：やだ。だって、花ちゃんの貯金、お父

さんが、おじさんが取ってるかもって言った。

母：そう？でもお母さんは、家においておくの不安だな。泥棒に入れちゃいそうで心配だな。

子：お風呂は？

母：ぬれちゃうもんね。抱いて寝ようか。

子：いやだいやだ。

母：ダイヤモンドとか、小さくして持ったら。

子：お母さんとおそろいの。お父さんには内緒？

母：お父さん、あんまり買って欲しくないから、内緒。

子：お父さんにも買ってあげようよ。

母：お父さんに渡したら使いそうだしね。

監督：はい。ダイヤモンドを買いました。何年後ぐらいにしましょうか。(次のペアに尋ねる。) 10年後の花と母にしましょうか。

ペア8 (子ども； F母；E)

子：ダイヤモンドの光はかわんないよ。

母：花も持ってるんだもんね。

子：誰にも見せない。

母：中学生なんだからお化粧品はやめなさいよ。まじめに学校へ行きなさい。

子：面白くないんだもん。

母：もう、貯金もないんでしょ。

子：ママに面倒見てもらうから。

母：高校どうするの。この間の成績何？ 130人中112番じゃない。

子：なかなか取れないよ、あの成績。

母：入る高校ないんじゃない。

子：ちゃんと先生指導してくれないんだもん。

母：塾へ行きなさいよ。

子：今更、教えてくれるところあるのかな。

7. 感想— (次のテーマにつながる箇所は下線をひいてある)

監督：いろいろな親子がありました。一言ずつ、今やっていたり見ていたりして感じたこ

とを。

○やっていて感じたことは、男の子しか居ないので、娘とつるめる感じってなんていいんだらう。ときめいちゃって。見ていて、2人の組み合わせによって、相手が居ることで、2人のやり取りで場が出来上がる。親子関係の持ち方、互いが居る、相互との関係でできる雰囲気を肌で感じられて、体験ってこういうことかなって思いました。

○お母さんをやっているとき、悪いお母さんというのがでてきそうで、普段でも、母親役って、これという母親役に自分をあてはめている。子どもの役はそのまま楽に楽しくできた。母親役をやると、辛いときがあった。頭でマニュアルを探して、見つからないと、困る。取っ払ってやれたら面白かったな。

○子ども役の時は困らして、と思って面白くやれた。お母さん役はこうあるべきだというところで動く。本当だったらどうすれば、困ってしまった。

○母親役のとき、構えちゃうんですね。いつもの自分と重ねちゃう。みんなと一緒にこうしないといけない。ちゃんとした母を演じないと人からどう思われるか、気になる。お金を持って帰りたいという本音はみんなある。人が見てると考えたり、いいお母さんやらないといけないと思う。

監督：「いいお母さん」というのを取り払ってしたらどうなるかというのも面白いかもしれませぬ。

○子どもが3人居て、そういう場に遭遇したことがある。こどもがおまわりさんに直行でそんな自分が入るところがなかった。でも、うちの親は拾ったのを使っていたな。自分は財布を拾ってもらったこともあるし、拾って持って行ってあげたこともあるし。

○子どもをやったとき、こうしなきゃだめといわれると、すぐ、はい、わかりましたが素直にでちゃう。言われたことはやらないと、そういう風に親からされてきたと感じまし

た。

○子どもの役をやって、最後まとまりなくって、でもあんなこと言ったことなかったな。

(穏やかな口調で話す。) ああやって、話す近い関係を感じたことがなかったな。すごく近い関係を感じた。

○思わぬ体験が転がり込む。最後に母親やって、不労所得を抱えた親子。突然心配になってきて、あせった親を感じた。お金もあるし、ふわふわと過ごしたとき、ふと気付いたら、すごく心配になる親になった。ひどく現実引き戻したくなる親の気持ちを感じた。先ほど、「身近に感じることもなかった」という話をなさって、ほっとした。一方的に言っていたように思っていたが、身近に感じてくれていた。親とは違う思いを子どもはする時があると感じました。

監督：ダイヤの話はどこへいったんだろ？

(笑い) 感想を聞いていて、夢がなくなったような気がしたのですが、現実に向きあうことができたんですね。後半、30分ないですけど、こんなことやってみたいということ意識してやってみますかね。良い親、悪い親ということが何回か出てきていて、悪い親。自分でも悪いと思っている親をやってみる。自分が思っている悪い親。2人でやりましょうか。

補助自我：子ども役は、お母さん役が選んだらどうかしら。

監督：親役の人が子ども役に何歳になってねと言ってください。どんな子になるかは子どもの自由です。

○悪い親ってわからない。子どもにとって辛い親ですか。私の中ではなりたいたいと思う親は常識から抜けていける親で、そういう親は世間からは悪い親と考えられているし、面と向かって辛い親ですか。

補助自我：悪いという言葉の解釈の違い。こういう悪さもあるし、ああいう悪さもある。この悪さやってみる。悪さを規定してできな

いじゃなくて、どれか選べばいい。いろんな種類があるんじゃないかしら。

<前段階で表演された多様な親子のあり方について、自分の日常のかかわりと対比させてみる試み。日常的に感じている自己を意識化する。>

8. 場面化による課題「悪い母親」の共有

【場面1】 5歳の女の子(A)と母(B)のやりとり(無視する)

子：ママ、一緒に遊んで。

母：やだ。

子：お人形あそびして。遊んで。

母：昨日、遊んだでしょ。どういう遊びがしたいの？

子：ままごとするの。

母：一人でできるじゃん。

子：ママ、どれがいい？ママ、これだから。

母：やんない。

(感想)

監督：見ていて、感じたこと、言いたいことありますか。

補助自我：何が悪いのかわからない。

○：母役のBさんが、「いやっ」て言うのを始めて聞いた気がする。

○：いつもうち、そんな感じ。

○：うちでも、今みたいなことは言わないから、言ったら罪悪感がある。

補助自我：今感じた罪悪感？

母役：これが続くともっとひどい言葉が出てきて、1人置いてどっかいたり無視したりする、それが私にとっては悪い。

子ども役：子どもを怒鳴ったり、無視したりやった後に、いやあな気分になる。

補助自我：それは、日常生活の中でしょ。今、そう感じたことは？

○：お母さん、忙しいのかな。具合悪いのかなって感じた。

補助自我：いやって言われても、それはお母さんのことをいや、嫌うとかそういうのと違うよね。

【場面2】 母；Cと子；D (健康管理のできない)

母：適当に食べてよ。もうやだ。

子：おなかが空いた。

母：昨日の残りがあるから。

子：だめ。

母：もうやめて。(子に背を向け、背中を丸めて頭を抱え込むようにして左右に振る。)

(感想)

母役：親だったらちゃんとやったら。やらなきゃしょうがないじゃん。て思う。身体が起き上がれないけど、親だったら当たり前だからって思う。

補助自我：葛藤がすごくあるんだ。

監督：休んでもいいのにねって思いましたけど。子ども役をしていてどう感じましたか。

子ども役：もう、1押しするとやってくれるような気がしました。

補助自我：もう、1押しされるとやっちゃうの？

母役：薬飲むから20分待って。効くまで、ってなってしまいます。

補助自我：それは悪いお母さんなの？

母役：健康管理ができないお母さんはだめ。健康ではつらつとしていてっていうイメージがあるから。

補助自我：きついねえ、それは。

【場面3】 母；Eと10歳の女の子；F。(聞き流す)

子：お母さん、私の部屋欲しいの。私のかわいい物をおきたいの。

母：場所がないんだよね。狭いから寝る場所とキッチンとダイニングしかないでしょ。

子：私10歳だし、かわいい物おいて囲まれてみたい。

母：うん、そうねえ。でも狭いから。

子：ねえ、お母さん、聞いているの？わかってんの？口だけでしょ。

母：そう？

(感想)

○：両方の気持ちがわかる気がする。子は部屋を欲しいんだろうな。

○：どこが悪いお母さんなのかわからない。子どもの話とか聞いているし。子どもが主張するのを、本当に聞いているのと怒ったとき、だめならだめってはっきりしてほしい。子にとって付き合いにくいお母さんかな。

監督：どんなつもりのお母さんだったんですか。

母役：話を聞くけど、聞き流してる。

補助自我：悪いと感じているの？

母役：本当に対応しているわけじゃないから。

子役：自分が本当にやりたいことを、だめって言われて、理論で言われてばばばーと帰ってこないから、言いたいこと言えてうれしかった。最後、どのくらい私の気持ちをわかってきているのか手ごたえがなかったから感情的に、母親の気持ちが帰ってくるのを待っているのかな。

[場面4] 母；Fと10歳の男の子；G（引っ張り込み威圧的）

子：ただいま。遊びに行ってくるね。

母：お母さんに出す物あるでしょ。連絡帳とか。

子：友達が待ってるから、早く行くね。

母：落ち着きなさいって。宿題は？

子：帰ってやるから。

母：話してから行きなさい。気持ちはわかるけど。座って。お母さんと友達とどっちが大事なの？

子：友達！

母：もう、帰ってきなさいよ。

子：はい。

(感想)

○：別に悪くない。

○：私だったらはいはいって言っちゃうけど。

○：うちだと子どもが話してくるから、逆。

母役：憂鬱な顔で迎えて、疲れているところで迎えるつもりだった。子どもの都合を無視

して、自分がさせたいことをしないと気がすまない。子どもを引っ張り込んででもやらせる。子どもを引っ張るのが悪い。

補助自我：子どもが元気で、それにあわせて元気になって行って、だんだん張りが出てきて、自分のペース、子どもの自由もやって悪くないですね。自分のモードでやって。あれが引き込むってことなの？

母役：威圧的なのというか、やりなさいという感じがよくない。

子役：うちはやんかっていうと、従わなければならないことを無言でやりだす。

補助自我：振り払う子だったら、悪いと思わないんだ。

子役：潜在的にそうしちゃってるところに罪悪感がある。子どもがそうしたいというのはよくわかっているのに、また後で宿題やりなさいとかいわなきゃならないかとか思うと、帰ってきたらすぐ言ってしまう。

○：それは悪いとは思わない。必要なことなんじゃないですか。連絡帳を見せたりとか。

子役：威圧的になる。やさしく導くのではなく、子どもに何が何でもやらす。私のわがまま。

母役：どっちが大事？って聞いたとき、私の言うことだから優先的に聞くべきだと思ったが、友達といわれて、抜けた気がした。お母さんって言われると、締め上げたくなる怖さを感じた。

監督：今日は時間になってしまいましたので、今日はここまでにしましょう。

観客でいらした方は、どういうお母さん役をしたいと考えていらしたかだけ言ってもらって、よければ次回に続けましょう。

○：逆バージョンで、子どもの気持ちは2番で、私の気持ちが1番。自分中心なお母さん。

○：子どもの設定を2歳か3歳にして。自分は、子どもを叩いたりするのが一番そのころがピークだったので。絶対に言うことを聞か

せて支配的にしてみたい。

○：悪い親のイメージが浮かばない。

【第2部】第6回目—前回のサイコドラマから3週間後のセッション。

ウォーミング・アップでは、「席を移動する」、「人に要求を出す・断る」を行い、次ぎに、参加者からの要望もあり、前回からのテーマを演じることになる。

1. 「悪い母親」を演じてみる

A：先回しなかったもので、自分が考えている悪い母親をできればなと思ってきました。誰かに子ども役を頼むのですか？

監督：そうですね。誰になってもらいましょうか。

(A 迷う。なかなか決められず、少し途方にくれた感じ。)

補助自我：私やろうかな。(A が悪い母親を演じようと硬くなっており、他のメンバーもこれから始まろうとしていることに不安や緊張を感じていたであろうが、補助自我の申し出に、場が少し和んだ。)

A：先生が一番手ごわい。(全体がしばしの笑いの渦に。しかし、張り詰めた感じは否めない。)

補助自我：幼稚園前ぐらいで？他には兄弟いないの？

A：弟がいます。(補助自我が隣の席にいたBを誘って登場)

監督：周りの人は、悪いお母さんのどこがいいところなのか見てみましょう。

* 場所 - ご飯を食べているところ。家。

母、姉5歳、弟3歳

母：食べて。(しばらく静かに食事が進む。)

(母は背をぴんと張って自分は食べずに子どもが食べるのをじっと見ている。)

姉：ニンジンやだ。(ニンジンをいじる感じで)

母：だめ。(姉はそれでも食べようとしなない。)じゃ、ご飯全部食べなくていい。(机

に見立てた空椅子を姉から離し、自分のほうに引く。)

姉：(だらっと座っている。)

母：ちゃんと座って。Y子ちゃん、お母さんの言うこと聞こえているの？言うこときかないとパシンですよ。(ご飯を取り上げる。)

姉：やだ。

母：だめ、向こうの部屋へ行きなさい。

(感想)

○：そんなに悪いとは思わなかった。ちゃんとした理由があるし、叫ぶわけでもないし、普通かなと。

○：最近、そのぐらいのことは言うだろうし、子どもは手綱を引かないと。ほめるときはほめてかわいがって、教えるところ怒っても教えて、分けないと。いいお母さんだと思う。これはだめって言えている。

○：口調が厳しかったのが自分の小さいころとオーバーラップして、自分も上の子にしていたな。自分のことばかり考えていました。

弟役：自分に被害が及ばないように。静かに様子を伺っていました。食べるときは楽しく食べたいな。1つニンジンだけ食べないからって全部だめって言うのは言いすぎかなと。
姉役：自分が強がる。母がNoということで「私はこうしたい」が強くなる。弱いからどうしようと思うが、強がる。厳しさという中で。

母役：もうちょっとで、多分、手がでてた。過去の自分を演じたけど、Y子ちゃんなんて言わなかった。今は、先生に言い返す子をやってもらったけど、言い返さなくて「はい」っていう子でもいい続ける。ああしなさい。こうしなさい。

補助自我：それは、過去でしょ？今は？

母役：今以上に、言葉で返ってくる子どもがいる。自分で確認したかったのだと思う。昔、こういうことやっていたんだ。思い出の中で。

2. 「悪いお母さん像」を支えている考え方は？

は？

監督：悪いお母さんというのを支えているのはどういう考えですか？（自分が思う悪いお母さんの、前提となるような考え方、子どもへの見方を共有して、「悪いお母さん役割」を取ってみる。そのことにより、「悪い」と思うことと、自分がしたいと思うこととのずれや共通性を見出す試み。）

A：子どもは親の言うことをきくもんなんだ、というのが動機にある。経過で失敗は許さない。

監督：子は親の言うことを聞くものなんだということ。それが1つ。それから？（しばらくして）はいはいということきく子どもだったら、悪いお母さんにはならないの？

A：次から次へと子どもは言うから。

監督：はい、子は親の言うことをきくもの、それが1番大きなものね。それぐらいかな。

A：思い通りに動かしたい。

監督：では、親の言うことを何でもきく子と思い通りに動かしたいお母さん役というのをやってみましょうか。（Dに子どもの役をたのむ）

母：こぼさないように。

子：はい。

母：自分でふきなさい。

子：どれでふくの？（服で拭くふりをする）

母：そんなところで拭いちゃいけません。そればかり食べないで別のものも食べなさい。こっちも食べるの。

監督：今、どんな感じでしたか？

A：ある面、満足なんですけど。次を探す。自分は食べられないぐらい。だから疲れる。

監督：子どもに一生懸命なのねえ。

A：（両手を前に出して、）こうなんですわね。

（そこしか見えないことを表現）

補助自我：いい子だったんだ。

監督：2つありましたね。他に何かありますか。

A：失敗も許せない。

（監督は、ホワイトボードにAの言った、子どもへの思いを3つを書く。）

- ・子は親の言うことを聞く。
- ・子は親の思い通りにする
- ・失敗は許さない

3. 母親の考えている悪い母親が活躍する場面—3つの役割特性をもつ子どもとのやり取り

（「悪い母親」と思われている役割体験を通して、「悪い母親像」から自由になり、子どもとの関係において自分らしい母親役割を見つける試み。）

*場面：母親と3人の子どもとの食事場面
母（X）／親の言うことを聞く子A／思い通りになる子B／失敗する子C

全員：いただきます。

C：お母さん、こぼしちゃった。（ビジョ、という感じでこぼす風）

母：今日はもうご飯食べなくていい。自分で拾って。

（Cが拾おうとする。Bも手伝う）

子ども達：ご馳走様でした。

母：（のこしているCに対して）まだ残っているじゃない。きれいに食べて。

C：今日、どこか行きたい。遊園地行こう？

BとA：いいね。

母：お母さん、買い物に行きたいの。

B：じゃあ、買い物に行こう。買い物、楽しいよ。

C：ええー、やだ。遊園地行こうよ。

B：買い物に行こうって。楽しいよ。電車に乗っていくんだよ。

母：3人は静かについてくること。

C：一人で家で留守番する。

母：食事どうするの？

C：一人でご飯作れるし。

母：だめです。無理よ。それはだめ。

B：（Cに対して）行こうよ。デパートだよ。

C：どうせ、何にも買ってもらえないもん。